

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）
セッション討議内容の記録

セッション名：コンテナターミナル	
日付：11月 1日（土）曜日、セッション時間：10:45～12:15	
司会者名（所属）：柴崎隆一（国総研）	
討議内容	<p>セッション全体： 研究の対象やアプローチ（方法論）が3件とも大きく異なるので、総合討議のようなことは行わなかった。以下には主に論文・発表の目的や趣旨に関するディスカッションの内容についてまとめる。</p>
	<p>（74）コンテナターミナルにおける船社専用形式とマルチユーザ形式の共用効果に関する研究 西村悦子（神戸大学）： ・研究の目的がややわかりにくい。マルチユーザ形式を推奨するというのか？ 船社専用形式とマルチユーザ形式の組み合わせを前提に、目的関数である船舶の総在港時間が最小となるパターンを計算によって選び出すことが可能である、ということを示すことが目的である。厳密解を求めることは難しいので、ヒューリスティックな解法を提案し、これによる計算結果を示した、ということである。</p>
	<p>（75）メガ・ターミナル・オペレータが参入したコンテナターミナルの生産効率性に関する実証研究 八木大介（神戸大学）： ・メガターミナルオペレータが参入した港湾が効率的に運営されているということを立証することがなかなかできなかったようであるが、港湾ごとに効率性を比較するのではなく、ターミナルごとに比較すると良いかもしれない。たとえば、中国の港湾では、ターミナルによって政府系企業が運営していたり、海外の民間オペレータが運営していたりするのでその比較は面白いかもしれない。</p>
	<p>（76）規模の経済と多層ネットワークを考慮した広域物流拠点配置モデルの開発 西垣雅弘（神戸大学）： ・規模の経済性を考慮したということは、解が一意に定まらず、厳密解を解くことを目的とした研究というよりは、現状をどれだけ当てられるかというモデルの構築を目指していると解釈してよいか？ パラメータを変化させると再現結果が大きく変化するので、そのなかには現状を再現できるような組み合わせも含まれる。ただし、どちらかというと、現在のところの研究の目的は、パラメータを変化させることによってどう状況が変化するかをシミュレートすることにある。</p>